

国語

注意

- 1 問題は **1** から **5** までで、18 ページにわたって印刷してあります。
また、解答用紙は両面に印刷してあります。
- 2 検査時間は五〇分で、終わりは午前九時五〇分です。
- 3 声を出して読んではいけません。
- 4 答えは全て解答用紙にHB又はBの鉛筆（シャープペンシルも可）を使って明確に記入し、
解答用紙だけを提出しなさい。
- 5 答えは特別の指示のあるもののほかは、各問のA・I・U・Eのうちから、最も適切なものを
それぞれ一つずつ選んで、その記号を書きなさい。また、答えに字数制限がある場合には、
や「などもそれぞれ一字と数えなさい。
- 6 答えは解答用紙の決められた欄からはみ出さないように書きなさい。
- 7 答えを直すときは、きれいに消してから、消しくずを残さないようにして、新しい答えを書きなさい。
- 8 受検番号を解答用紙の決められた欄に書き、その数字の ○ ○ ○ ○ の中を正確に塗りつぶしなさい。
- 9 解答用紙は、汚したり、折り曲げたりしてはいけません。

1

次の各文の――を付けた漢字の読みがなを書け。

- (1) すばやく糸を手繰る。
- (2) 紳士服を縫製する。
- (3) 頓狂な声をあげる。
- (4) 唾棄すべき悪行だ。
- (5) 海の深淺を測量する。

2

次の各文の――を付けたかたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

- (1) この器はめつたにないシロモノだ。
- (2) ソウバン、君の努力は実を結ぶだろう。
- (3) 新薬の開発がチケンの段階に進む。
- (4) あの人はキイツポンな性格だ。
- (5) 事態をタイシヨコウシヨから眺める。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。(＊印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。)

各務先生は、悠然と廊下を歩き、悠然と教室に入ってきた。各務先生は決して堂々とはしていなかった。赤茶けた八字髭を生やしていたが、小柄で、痩せて、撫で肩であった。それでいて、朝礼に臨んでいるところや廊下を歩いているところなどは、如何にも悠然と構えていて、寧ろ大柄に見紛うほどであった。両腕を、口髭の延長線上に矢張り八の字に伸して、右手には定規やコンパス、左手には白墨筥や教科書や出席簿や閻魔帳などを持ち、脚を踏ん張っていた。抱え込んで、猫背で歩くということはなかった。いつも、古びた紋附に袴を着け、紺足袋に上草履を穿ち、胸を張っていた。夏になると、キビラと称する麻織の着物を着て来たが、キビラはまた生徒の夏の制服でもあった。春に、冬の制服は、紺の筒袖に紺の袴であったが、それは大正の終の頃までつづいた。毎朝服装検査があつて、一番口喧しいのが各務先生であった。先生は、袴の紐や背囊の紐を垂している生徒を見附けると、側へ寄つて行つてツンツンと引つ張つた。口喧しい癖に、その仕草が子供っぽくて、注意される生徒は自ずと顔を綻ばすのであつた。中には、注意をされると遣り返し、押問答するのが面白さに、わざと袴や背囊の紐を垂らしておいて、各務先生から注意されるのを待ち設けている生徒もあつた。① 僕なども、その一人であつた。

各務先生が洋服を着て来ると、生徒はわあッと囃し立てた。各務先生が洋服を着て来ると言えば、修学旅行か運動会の時に限られていた。それも時代遅れの、恐らく明治三十年前後のものど覚しい洋服で、最も人眼を驚かしたのは、そのネクタイであつた。なんだか、ネル地か毛ば立った羅紗のような柄で、それが途法もなく大きく、胸高に結ばれているのだつた。

各務先生は、学校の主であつた。学校の創立が明治三十五年で、それ以来昭和の七八年頃退職するまで、三十年に余る間、田舎の小さな中学校に埋もれて、その教員生活の殆ど全部を終えたのであつた。それ以前には、どこかの中学に一二年居たことがあるらしい。学校も、最初は県立第二中学の分校として出発し、独立して第四中学となり、それから第三中学となり、現在のN中学に発展して行つた。各務先生はその間にあつて、十代に余る校長を送り迎えて湍りなく、時には校長排斥の忌わしい同盟休校のようなものも度々あつて、創立以来の古い先生やその他が、次々に学校を去つて行つた中に、各務先生だけは、いつも清く圏外に立つて、身を全うせられたのであつた。と言つても、保身の術に汲々としていたわけではない。先生の人格が自然にそうさせたのである。生徒の方は生徒の方で、各務先生だけは傷つけてはならない、各務先生だけには巻き添えを食わせてはならないと、意識無意識のうち、各務先生を守り合つて来たことも、争われない事実である。教頭という声は常にありながら、各務先生自身が肯んじないので、最後まで三席であつた。

数ある先生の中には、授業中に、明らさまに生徒の歛心を買うような無駄口を喋舌る先生もあつた。交通不便な、僻遠の、小さな中学に愛想を尽かして、来任匆匆、直ぐ飛び出して行く先生もあつた。土曜日や日曜日には、草鞋脚絆掛けで村々を廻つて、教化の講演に歩く先生もあつた。第一次世界大戦当時の好景気に釣られて、銀行の重役に鞍替えて風を切っていたかと思うと、不況の波を食つて銀行が没落すると、直ぐまた学校に舞い戻つて来ていた先生もあつた。

これは、僕達が学校に籍を置いた時分のことであつた。まして三十年の間には、種種雑多な風潮が、各務先生の周囲を取巻いたにちがいない。しかし、どのような風潮に取巻かれようとも、各務先生だけは、右も見なければ、左も見なかった。ただ、来る日も来る日も、手に定規

とコムパスとを持って、教室に現われ、教室を出て行くだけであった。他のことは、何もしなかった。何も考えていなかった。ただ、それだけであった。三十年に余る間、ただ、それだけであった。だが、思いきや、その間に、N中学の精神が、この先生によって体现せられてみようとは。そしてそれが恪勤[＊]精勵[＊]だとか、温厚篤実[＊]だとか、そんな面白くもない辞令で片附けられるものと訳が違うことは勿論[＊]である。若しそれだけのことであるなら、あれほど多くの校友に親しまれたり懐[＊]しがられたりすることはないであろう。十年経[＊]っても二十年経[＊]っても、僕達に忘れられないのは、あの各務先生の孤独に徹した風格と人間味なのである。各務先生は、物理学校の古い出身だとかで、十年一日の如[＊]く、菊池大麓[＊]の幾何の本を使っていた。その本のことなら、隅から隅まで知り悉[＊]していたにちがいない。その代[＊]り、新しい教科から遅れていたことも否[＊]めなかつたにちがいない。各務先生が素手でもって線を引いたり円を描いたりすると、定規やコムパスを使つたと同じであった。PとQや、PとRなどの式が長くつづいて、それを小括弧や中括弧がかかっているのを見ると、虫が這[＊]っているように綺麗[＊]だった。そしてそれらの式は、蚕[＊]が糸を吐き出すように、各務先生の白墨から吐き出された。式を書く合[＊]い間合[＊]い間には、怠[＊]け者や悪戯[＊]者をガミガミ叱りつけて、口から泡を飛ばしたりしているが、しかし時間が終[＊]ると、もうけるりとして手をはたき、油気のない頭や色褪[＊]せた紋附に白墨の粉をかぶつたまま、教壇を降りて行くのだった。

或[＊]る時僕は、黒板に出て幾何の問題を解かされたので、「角Aと角Bノ等シキコトハ火ヲ睹ルヨリモ明カナリ」と答[＊]を書いて帰[＊]つて来た。すると各務先生は、黒板拭きを取[＊]つて、それを消しながら直すのであった。「火ヲ睹ルヨリモ明カナリは余計[＊]だね。故二角Aと角B相等シデ十分である。」

そう言う各務先生は、悪戯と知[＊]つてか知らいでか、怒りもしなければ咎[＊]めもしない。勿論裏を掻[＊]こうとしているのでもない。真面目なのである。その顔を見ても、微塵[＊]の冗談気もない。有[＊]るが儘[＊]のものを、まともに、本気になつて相手にしているのである。しかしその本気なところが、如何なる洒落[＊]や冗談口よりも可笑[＊]しいので、各務先生がそんなふう[＊]に言う[＊]と、みんな思わず笑[＊]い出すのであった。それで僕[＊]の悪戯も望[＊]みを達[＊]するわけであつたが、各務先生は、非常にすぐれた心理家だつたのかも知れない。

榎本武重君は、黒板に出て問題を解いた時、窓雨生と署名して席に戻つて来た。

「この問題を解いたのは、誰かね。」と各務先生は生徒の顔を見渡した。

「はい、私であります。」と榎本君はニコニコしながら答えた。

「君は窓雨という名前なのかね。」

「いいえ、それは私の号であります。」榎本君は、教科書にも筆記帳にも、すべて榎本窓雨と署名しているのだった。

「号？」と各務先生は聞き返した。みんな笑つた。

「はい、私は雨の日に、窓から外を眺[＊]めていまして、雨の滴が軒からポタポタ落ちるのを見ているのが、とても好きなもんですから。」

真面目臭[＊]つて、榎本君がそう答えたので、教室中はどよめいた。その時くらい、各務先生が困[＊]つた顔をしたことはなかつた。先生は、小指の先の伸びた爪で、皺[＊]んだ頬[＊]つべたを掻[＊]きながら、苦笑いをするきりで二の句が継げなかつた。詩的感傷[＊]くらい、各務先生にとって苦手なものではなかつたにちがいない。榎本君はまんまと、各務先生を攻略したのであつた。

雨と言[＊]えば、梅雨頃の或[＊]る小雨のそぼ降る日のことであつた。雨に濡[＊]れたカナリヤが一羽、どこからともなく飛んで来て、二階の手摺[＊]に止[＊]り、それから廊下に降りて、教室の中へ這[＊]い込んで来たことがあつた。

授業は丁度各務先生の時間で、入口に近く坐った酒井保君がつと席を立ててカナリヤを掴み、各務先生の反応を試めすかの如く、それを教卓の上に持つて行った。

「先生、カナリヤが飛んで来ました。」

それを見ると、各務先生は色を為して叫んだ。

「君、何やらんことをするのか。もとのところへ置いとぎ給え。」

酒井君はまたカナリヤを掴んで、もとのところへ持つて行った。各務先生は、それなりカナリヤなんか見向きもせず、黒板に向つて、数式を示しながら、説明をつづけた。しかし、生徒の注意はもはやそこにはなかった。カナリヤの一挙一動に聚つていた。人怯じせぬカナリヤは徐々に這つて、教壇に上り、それから、何思つたか、教卓の上に飛び上つたのである。カナリヤは眼下にありながら、それでも各務先生は見向きもしない。カナリヤは濡れた姿で、寒そうに、教卓の上に蹲つた。

新しい数式を書く必要があつて、各務先生は黒板に向かねばならなかつた。少し手間取つてる隙を狙つて、教卓の真ん前の席にいた小菅達道君が、ひよいと手を伸してカナリヤを掴み、ふところに入れて素知らぬ顔していた。各務先生は式を書き終えてしまうと、こちらを振向いた。その拍子に、思わず視線が教卓の上に落ちた。各務先生としては、不覚のことだったにちがいない。しかし、そこには、カナリヤの姿は、影も形も見えなかつた。まるで手品のような塩梅である。皆が噤し立てるように声を挙げた。その笑いで、各務先生は総てを察したのにちがいない。

(4) 「誰だ、ここにいた小鳥を取つた者は。」と各務先生は、額に筋を立てて、詰め寄るように叫んだ。そして先ず、特徴ある癖の、中指と人差指の二本指しで、まん前の小菅君を責めた。

「君だろ、う。」

「いいえ、私ではありません。」と小菅君は含み笑いをしながら答えた。

「君だろ、う。」

「いいえ。」

「君だろ、う。」

「いいえ。」

小菅君の前後に並んだ二三人が二本指の追及を受けたが、勿論みな知らぬ存ぜぬであつた。すると、あの榎本窓雨君が、窓際の席から言つた。

「先生、カナリヤはさつき、この窓から飛んで行きましたよ。」

(5) みんな笑つた。榎本君が指差す窓の外には、小雨が煙つて、軒端からは詭え向きに雨の雫が落ちていた。先生も腰を折られた形で、途端に何喰わぬ顔に返つて、新しい説明に取りかかつた。

(上林曉「孤独先生」による)

〔注〕背囊——学生などが物品を入れて背に負う方形のかばん。

途法——「途方」に同じ。

三席——主席、次席に次ぐ立場。

匆匆——あわただしい様子。

コムパス——「コンパス」に同じ。

恪勤精励——自分の仕事や学業に一生懸命励むこと。

菊池大麓——明治時代から大正時代の数学者。

〔問1〕⁽¹⁾ 僕なども、その一人であった。とあるが、このときの「僕」の様子として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 各務先生の大人げない所作が見られるのを期待してわざわざ各務先生の気を引き、囃し立てるのを楽しみにしている様子。

イ 各務先生と言い合いになるのを期待して意図的に各務先生の目を引く行動を仕掛け、指導されるのを楽しみにしている様子。

ウ 各務先生にやり込められるのを期待して故意に校則に反する風をよそおい、各務先生と口論できるのを楽しみにしている様子。

エ 各務先生と意地の張り合いになるのを期待してあえて反抗的な態度をとり、各務先生を逆上させるのを楽しみにしている様子。

〔問2〕⁽²⁾ そしてそれらの式は、蚕が糸を吐き出すように、各務先生の白墨から吐き出された。とあるが、この表現について述べたものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 各務先生が黒板に白墨で書いた数式が、単調ではあるものの次々と書かれていくうちに、それが秩序なく黒板を埋め尽くしていく様子を簡潔に表現している。

イ 各務先生が黒板に白墨で書いた数式が、古い教え方にこだわって書かれていくので、長くなればなるほど読みにくくなっていく様子を皮肉で表現している。

ウ 各務先生が黒板に白墨で書いた数式が、手当たり次第に書かれていくように見えて、実は正確で計画的なものであった様子を逆説的に表現している。

エ 各務先生が黒板に白墨で書いた数式が、複雑なものであってもよどみなく書かれていき、それが整然と形を成していく様子を比喩的に表現している。

〔問3〕⁽³⁾ それで僕の悪戯も望みを達するわけであったが、各務先生

は、非常にすぐれた心理家だったのかも知れない。とあるが、

「各務先生は、非常にすぐれた心理家だったのかも知れない」と

「僕」が考える理由として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 「僕」の悪ふざけを理解しつつも平然と応対することが、生徒たちを満足させるには最適な方法であると、あたかも全てを見通したうえで
の対応であったように感じられたから。

イ 「僕」の悪ふざけに対して、諭すように導くことが生徒たちに数学を正しく理解させるには効果的な方法であると、事態を冷静に分析した
うえでの対応であったように感じられたから。

ウ 「僕」の悪ふざけで気分を害しながらも知らないふりをしてやり過ご
すことが、生徒に反省を促すには合理的な方法であると、感情を抑制
したうえでの対応であったように感じられたから。

エ 「僕」の悪ふざけの裏にある反抗心を見抜き、要点のみを指摘するこ
とが「僕」を他の生徒の非難から守るには最適な方法であると、確信
を得たうえでの対応であったように感じられたから。

〔問4〕⁽⁴⁾ 「誰だ、ここにいた小鳥を取った者は。」と各務先生は、額に

筋を立てて、詰め寄るように叫んだ。とあるが、このときの各務

先生の様子として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 生徒の笑い声がかかって振り向いた瞬間にからかわれたことに
気づき、数式の理解もそこそこにして自分を冷やかさうとする態度を
叱責しようとしている。

イ 振り向いた瞬間につい教卓の上に目をやってカナリヤがいないのに
気づき、生徒が授業に集中せずカナリヤを隠して自分をからかってい
ることに憤慨している。

ウ 自分の言いつけ通りに生徒が動いたことを承知してはいるものの、
冷たい雨の中にカナリヤを放してしまう生徒たちの非情さに失望して
落胆している。

エ 生徒がカナリヤに驚くほど関心を抱いていることを承知してはいる
ものの、生き物を少しも大切にしないで粗雑に扱う生徒の態度に困惑
している。

〔問5〕 みんな笑った。とあるが、なぜ「みんな笑った」のか。解答欄の(5)「ことが面白かったから。」に続くように六十字以上八十字以内で説明せよ。

〔問6〕本文の内容や表現について述べた説明として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 校内で見かける各務先生の動作や外見を写實的に描写することで、主人公の「僕」が感じる各務先生のアンバランスで一定しない人柄を印象的に表している。

イ N中学が発展していくまでの沿革と各務先生の略歴を重ねて語ることとで、各務先生の教員として大成していく様子が相対的に強調されて伝わるように工夫している。

ウ 時代による変化に直面する学校の様子と各務先生の三十年に余る教員人生を対比的に描くことで、各務先生が教育に愚直に向かう様子を印象的に描いている。

エ 他の先生の教師らしからぬ数々の行為を挙げ連ねることで、教育に勤勉に取り組まない他の教師を各務先生が批判的に見ていたことを暗示している。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。

気恥ずかしくとも改めてこう言おう、夢や理想は現実を導く力をもっている、と。そもそも、現実と異なる世界を思い描くことなしには、どうして現実を変えることができるだろうか。どうしてより良い生へと向かっていくことができるだろうか。現実と異なる世界を思い描くこと、それによって私たちの行為に意味を与え、私たちの生を意味で充実させること、これは私たちがもつ立派な能力である。

現実とは異なる積極的な力が理想にはあり、それは現実に新たな意味を与えるということである。今現在のなかにどっぴりとつかっているかぎり、既存の現実に取り添っているかぎり、そのかぎりでは何らの可能性をも出てこない。夢や理想をもつことがないのならば、いったい何がわれわれをこの現実から抜け出させてくれるのか。私たちは夢や理想があるからこそそこへ向かって努力するし、世界を変えていくことができる。理想はたんに現実離れしてではなく、現実の中で現実を導くという重大な働きをなしている。それは可能的でありつつ私たちが動かす。将来に実現されるべきものとして、いまだどこにもないものでありながら、人々をそこへ導く。⁽¹⁾ こうした現実の作用を發揮しながら、現実に意味を与えている。

いわゆる目的論的な世界観や、理想主義などを、ここで持ち出すまでもないかもしれないが、目的論的にしか、つまり何かの目的に向かうものとしてしか、うまく意味が与えられないものがある。代表的なのは有機的な自然、つまり「生命」をめぐる自然である。そして「理想」もまた目的の一種である。もし「理想主義」と呼ばれるものが何かしら有益なものであるとすれば、理想というものを、そこへ私たちを引き寄せる力をもち、目的となることでそこへ向かう力を引き出す何かとして、正當に評価している点においてである。どこにもないにもかかわらず、実

際に私たちを動かすようなものとして、理想は私たちの動力である。私たちを導くことを通して、理想は私たちの生に意味を与える。

しかし、理想は必ずしも憧れの対象という形をとらない。ときに目に見える形をとらずに、理想は「問い」という形式をとることがある。問いは答えを予想しており、その答えが理想となつて、問う私たち自身を導くのである。たとえば、「自分は本当は何をしたいのだろう」と問いつつ生きているとしよう。この場合、本当にしたいことを探しつつ生きているわけだが、こうした問いがなければ、そもそも本当にしたいことは見つからないかもしれない。問いがあることで、はじめて「したいこと」が姿を表すのである。⁽²⁾ いわば、問いが意味を導くのである。

逆に言えば、問いに対する答えの表象が憧れをもたらず。憧れをもつことができるというのは、そして夢が私たちの生きる意味を与えてくれるというのは、幸せなことである。理想によって意味が与えられているかぎり、すべてのものの意味ははっきりしている。この意味で、理想は世界を照らし出す光であるとさえ言える。何のために生きているのか、その答えは理想によって与えられている。生きていることの意味もまた、理想が与えてくれる。生きる意味をもつことは幸福である。

私たちは重層的な観点を持ち、自らがもちうるさまざまな役割を使い分けることで、世界の中で生きている。目の前にない可能性についてもさまざまな角度から検討し、考察することができるのは、まさに私たちが重層的な観点を獲得しているからである。私たちはさらに、現実とは異なる理想までももつことができる。理想や問いを抱きつつ、この世界が動いていくその先端へと自ら進み出て、歴史の創造の瞬間に立つことができる。そのとき私たちはかつての人間たちと同じようにこの世界を作り上げることに参加していると感じ、かつ彼らの気持ちを理解することができると感じる。今は亡き、過去の世界を突き動かしていた人物たちの思いを、自らが反復していることに気づくことで、私たちは偉大な

る生命の連続性を認め、脈々と続いてきたものを新たに反復することとして、生きることを理解する。⁽³⁾ 私たちの具体的なあり方とは、こうした豊かさをもつ。

さて、物事を多角的に見ることができ、理想や問いをももつ自己は、自己を変えようとするだろう。自己による決定の一つとしての行為は、外を変えるという動きであり、基本的に身体を介した運動をもなっている。だが、それとは別にまた、内を変えようとする行為もある。これは身体を介した運動をとまなうとは言いにくく、自分の心への訴えかけや働きかけによるものである。

⁽⁴⁾ もつとも、外を変える行為でさえも、外へと一方向的に向かつていくものではないだろう。私たち自身が行為しなければならぬという点では、何らかの仕方でも、内に対する行為をもなっているとも言える。何かの行動をしようとしても、行動に踏み出せないということはありふれたことであるし、行動に踏み出すために自身に働きかけなければならぬ場面は大変に多い。外が抵抗をみせるのと同じく、内もまた時に抵抗をみせる。そして両者は時に連動しているのであり、どちらが内で、どちらが外か、決め難い^がこともある。

私たちは欲望に駆られると同時に、欲望とも言えない何かによって内側から支配されているとも感じている。何かによって刷り込まれた義務感や道徳心が、内側から自分に命令してくると感じるかもしれない。それは「気づき」によって克服することができるとは限らないが、それでもなお、性格や性向と呼ばれるものが、自らを内側から規定している。これらを変えたいと私たち自身が思うこともある。たとえば、何かに依存してしまう自分を変えたいときなどがそうである。しかし、外への働きかけと同等か、あるいはそれ以上に、内への働きかけは難しい。

自分自身へと働きかけるときにもさまざまな場合があるが、自らの内へと、心へと働きかけるときに典型的なのは、先にも例に挙げた「自分

は本当には何がしたいのか」と問う場合であろう。こういった問いは、「いま自分のしていることが本当はしたいことではないのではないか」という疑問のもとに発せられるのではないだろうか。もし問わなければ、本当にしたいわけではないことをし続けることになるだけだろう。つまり、問うているというよりは欲求や欲望を整理し、そこに秩序をもたらしたり変化させたりしているのである。本来ならそれほどしたいわけではないのにしていることから、本当にしたいことを選び出すというのは、たんに認識をしているのではなく、自己を変える行為なのである。

もちろんこれは認識をとまなう働きかけであるが、それほどしたいわけではないものを整理して、そこから本当の欲求を選び分けるためには、認識だけでなく自己への働きかけが必要であろう。そしておそらく、「私を知ろうとする私」をめぐる困難よりも、「私を変えようとする私」をめぐる困難のほうが、より切実である。⁽⁵⁾ 両者は似ているように見えるが、大きく異なっている。

哲学的によく論じられてきた前者が、知的な関心の枠内に収まるものであることは、すでに論じてきた。私を知ろうとするのは、あくまでも自身への気づきを前提とした上でのことであるが、対象としての自己を知ることが対象認識の一環である。それに対して、自己を変えようというのは、変えられる自己と変える自己との同一性はもはや崩れている。変えようとする自己は、すでに変えられる自己とは同じところに立っていない。少なくとも、自己を知る自己が、二つの自己の同一性を前提とせざるを得ないのとは、明らかに異なっている。

自己を変える自己は、二つの自己が同じであることを強く要求することはない。もちろん、二つの自己がまったく別であれば困るけれども、しかし自己認識の場合とは異なり、まさに自己を変えたいわけだから、変える側の自己はむしろどうでも良いのであって、あくまでも変えられる側の自己の状態のみが問題となっているからである。自己は非同一的

なものとして、自らを変えようとしている。

ただし、実際に自身を変えようとするときは、認識の場合と同じくま
さに対象にかかわるようにして自身へとかかわるのであり、難しいこと
があるとすれば、それは自己をまさに対象的なものとして取り扱うこと
ろにある。手始めにできることは、物的なことを通して自己を変える
手段をとることだ。衣服を変えてみれば、部屋の装飾を変えてみれば、
気分が変わるし、それによって自分も変わるかもしれない。もちろん、
こうした手段によって変えられることには限界があるために、自らの心
を変えるところは、なかなか容易にはできないことだ。そこで次に、
自らの内なる心への働きかけは、自分に言い聞かせるなどの、言葉を介
した介入を行うだろう。他者の心へと容易に介入できないのと同じく、
自分自身の心を動かすこともまた、容易ではないものの、それでも私た
ちは自己に声をかけ、自己を問いつめることで、自己を変じようとする。
これもまた、具体的な自己の姿である。

(朝倉友海「ことばと世界が変わるとき」による)

〔問1〕⁽¹⁾ こうした現実の作用を發揮しながら、現実の意味を与えて

いる。とはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 人々が理想を模索するにつれて、理想は過去の成功事例に準じるよ
うに導き、人々の現実への認識を新しいものにするということ。

イ 人々が人生を目的論的にしか捉えないため、理想は非現実的な推
進力を帯び、人々の生命への認識を新しいものにするということ。

ウ 人々が理想の実現は困難だと思っけていても、理想は現実の捉え直
しを可能にし、人々の理想への認識を新しいものにするということ。

エ 人々が現状を変える過程において、理想は現実と異なる世界の可能
性を示し、人々の今現在への認識を新しいものにするということ。

〔問2〕⁽²⁾ いわば、問いが意味を導くのである。とあるが、この部分を説明したものとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 自分がどんな理想を抱いているか自覚したうえで、その実現のために自分が本当にすべきことは何かを問うことを通して、生きる意味を見いだすことができるということ。

イ 自分は何のために生きているのかと自分自身に問うことで、それまで意識されなかった理想が発見され、将来幸せになるための方法を理解することができるということ。

ウ 自分が理想を明確な姿で思い描くことがなかったとしても、自分が問うことを手がかりとして、あるべき人生の在り方を考え始めることができるということ。

エ 自分に問うことなしには憧れは存在せず、憧れがなければ理想に到達できないため、人生において問うことは不可欠であると捉えることができるということ。

〔問3〕⁽³⁾ 私たちの具体的なあり方とは、こうした豊かさをもつ。の具体例として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 限りある資源を大切に使うために、高校生がもう着なくなった衣服をフリーマーケットに出品する中で、そこで出品されている品物一つ一つに込められた人々の思い出に感動し、ものを大切に使う意識がいつそう高まる。

イ 社会のグローバル化に合わせて国際理解を深めるために、高校生が留学生から祖国の豊作を祝う伝統行事について話を聞く中で、日本にも同じような行事があることを思い出し、人々が時空を超えて共有してきた思いにしみじみと感じ入る。

ウ 高校時代から抱き続けた宇宙に関する謎を解明するために、これまでの理論にとらわれずに独自の研究を重ねていく中で、常識を大きくくつがえす理論を打ち立てることに成功し、その成果を後進の科学者たちに引き継ぐことに生きがいを感じる。

エ 地元の祭りの参加者の減少を食い止め盛り上げるために、高校生が祭りの実行委員会に初めて参加して案を出し合う中で、地域の伝統を受け継ぎ発展させてきた人々の思いと自分の思いに重なる部分を見だし、地域の一員としての自覚を新たにす。

〔問4〕⁽⁴⁾ もっとも、外を変える行為でさえも、外へと一方向的に向かっているものではないだろう。とあるが、それはなぜか。六十五字以上八十字以内で説明せよ。

〔問5〕⁽⁵⁾ 両者は似ているように見えるが、大きく異なってもいる。とあるが、その理由を説明したものととして最も適切なのは、次のうちではどれか。

- ア 自分を知らうとすることも変えようとするとも、自己を認識するという点では同じだが、自分を変えようとする際は、変えようとする自分と変えられる自分が異なる存在だと認識することになるから。
- イ 自分を知らうとすることも変えようとするとも、どちらも自分と同じ存在であるはずの自分を重視するという意味で観念的であるが、変えようとするとは即物的な発想に基づく働きかけを伴うから。
- ウ 自分を知らうとすることも変えようとするとも、自己を理解する行為を含んでいるという点では同じだが、自分を知らうとする過程の中では、自分が本当にしたいことを選び出すことも必要となるから。
- エ 自分を知らうとすることも変えようとするとも、どちらも対象へかかわるようにして自己とかわるが、変えようとする私は対象の私と非同一でもよいので、変えようとする方が問題が生じにくいから。

〔問6〕 夢や理想は現実を導く力をもっている。とあるが、このことについてあなたはどのように考えるか。本文全体の内容を踏まえたうえで、社会的課題を一つ挙げて二百字以内で書け。なお、書き出しや改行の際の空欄や、や。や。や「などもそれぞれ字数に数えよ。

次の文章は、平安時代中期に造営された粟田山荘の障子の絵を見て詠まれた和歌や漢詩について述べたものである。これを読んで、あと各問に答えよ。なお、文章中の□内は、現代語訳を補ったものである。（*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

まず、伝統的な名所「住吉」を取り上げてみる。「惠慶集」に載るのは次の歌である。

住吉に、海人の家あり

風吹かぬ夏の日なれど住の江の松のこずゑは波ぞ立ちける

(二〇〇)

住吉に、海人の家がある。

風が吹かない夏の日だけど住の江の松のこずゑには波が立っているよ。

惠慶は歌の中では、「住吉」ではなくて、「住の江」と詠んでいるが、『古今集』以降、「住吉」は主に住吉社を言い、「住の江」は住吉社あたりの入り江を言うことされる。「松」を代表的景物とし、『古今集』撰者を務めた凡河内躬恒の次の屏風歌がよく知られていた。

住の江の松を秋風吹くからに声うち添ふる沖つ白波

(古今集・賀・三六〇)

住の江の松に秋風が吹いて松が音を立てると、それに応じて音を奏でる沖の白波よ。

惠慶は、「住の江の松に秋風が吹く」と詠むこの躬恒歌を踏まえて、逆に「風が吹かない夏の日だけど」とする。躬恒歌が秋なのに対して、惠慶歌は夏、躬恒が波の「音」を取り上げるのに対して、惠慶は視覚的表現に終始するのも対照的である。「風が吹かない」とするのは、太平の世が比喩的に「風枝を鳴らさず」（論衡）と言われたことによって、祝意をこめるのだらう。惠慶歌の下の句「松の木末には波が立っているよ」とは、具体的にどのような景色を思い浮かべたらよいかのかわかりにくいところだが、惠慶より後に詠まれた、経信の「沖つ風吹きにけらしな住吉の松の下枝を洗ふ白波」（後拾遺集・雑四・一〇六三）などからすると、水際に生えた松の水面近くまで伸びた下枝の木末のあたりに波が立っている景かと思われる。画中に入り込んで住の江に立ち、海を背景に立つ松を、少し離れたところから眺めているという設定なのではないか。⁽¹⁾ 風が吹いて波が立つのは当たり前、風が吹かないのに波が立っている、これはやはり住吉社の神域だからこそ不思議な景色であろう。それを「ぞ」で強調して、「なんと波が立っているよ」と不思議がってみせているのである。

同じ場面に対して詠まれた匡衡の漢詩は次のようなものである。

海浜の神祠

海浜の祠宇 煙波に枕る

海辺の社は、霞みわたった水面を背景に立ち、

松の岸 蘆の洲に 古意多し

岸辺の松も、蘆の生えた洲も、古の趣を伝えている。

日暮れて 人帰り 風定まりて後

日が暮れて、参詣の人が帰って、風が風いだ後は、

遙かに聴く 沙月に漁歌を唱へるを

遙か遠くから、砂浜を照らす月のもと漁師の歌う歌が聞こえてくる。

(2) 惠慶歌と比べると、風が静まったところだけは共通するが、違

う部分のほうが目立っている。^{*}先に述べたように題にも詩にも「住吉」とは見えない。しかし、当然、住吉社あたりの景色を前提に詠まれており、その景色の中心に「海浜の祠宇」（海辺の社）を浮かび上がらせている。この障子の同題の藤原為時の詩が『本朝麗藻』（八六）に入っているが、そちらでも「社壇」という表現が詩の中に見える。対して、和歌では、「住吉」「住の江」はよく詠まれても、「住吉の社」が直接詠まれることはほとんどない。惠慶の歌でも、そこが住吉社の神域であることは意識されているが、「社」は描き出されていない。歌の場合、他の寺社でも同様で、たとえば「初瀬山」で「鐘」が詠まれれば、長谷寺の鐘に決まっているのだが、「長谷寺」が直接詠み込まれることは、まずない。

さらに、もっと大きく惠慶歌と違うと感じるのは、時間の切り取り方、情景の描き方だろう。匡衡の詩では、日が暮れる前から夕暮れ時、さらにすっかり夜になって月が昇ったところまで、時間の経過に伴う風景の変化がとらえられている。じつと住吉社あたりにたえずいる人の立場で詠まれているのだと思われる。取り上げる景物も漢詩のほうが断然多い。祠宇、煙波、松、岸、蘆、洲、人、風、沙月、漁歌。表音文字で三十一文字しか使えない和歌と、表意文字の漢字を用いる漢詩では、当然のことながら、同じく一首の歌、一篇の詩と言っても情報量が全く違う。そうした特性に従って、和歌は先行歌による名所のイメージを生かし、読者の想像に任せる部分を多くするのに対し、漢詩は場面や状況をきっちり描こうとする。この障子絵の鑑賞者は、和歌を読めば、松の木末、ほぼその一点に焦点を合わせて、神域の不思議さを思うことになり、漢詩を読めば、画面の隅々まで眺め、夜になった景色を想像し、漁師の歌を聞くような気持ちになったことだろう。

また、改めて歌と詩を声に出して詠めば、そのリズムの違いにも気づかされる。この詩には含まれていないが、匡衡の漢詩には「渺々」

「漫々」「依々」「猥々」「重々」などの疊語がよく使われ、それが漢詩らしいリズムを生むのに一役買っている。

この一例を見ただけでも、同じ名所やまと絵に添えられながら、和歌には和歌の、漢詩には漢詩の領分があることが了解されるのではないだろうか。

次に、名所の並びでは「住吉」より前に戻ることになるが、「布引滝」を取り上げてみよう。布引滝は、現在の兵庫県神戸市、新幹線の新神戸駅から歩いて行ける距離にある。生田川上流の布引溪谷に位置し、雄滝・雌滝など四つの滝からなり、海上からも眺められる名所として知られ、古くからよく貴族が遊覧している。^{*}『伊勢物語』八七段は、⁽³⁾「昔男」が兄や友人たちと連れだつて、葦屋里から布引滝を訪れて帰ってくるという話である。ただし、「布引滝」という名を一首の中に詠み込む歌はというと、古い例は見えない。そうした例が見えるようになるのは、ちょうどこの粟田山荘障子絵詩歌の時代からである。『伊勢物語』でも、布引滝の場面で滝の歌は詠まれているが、「布引滝」という名は歌に詠み込まれていない。「布引滝」と聞くと、『伊勢物語』の例もあり、伝統的な名所と思うかもしれないが、実のところ、この時代においては、現地詠から出発し、名所の仲間入りをしようとしていた新しい名所なのである。

『惠慶集』から歌を引いてみよう。

夏、布引の滝見る人あり

夏衣涼みがてらにたちもきむ千尋さらせる布引の滝（一九七）

解釈すると、「夏衣を裁って着て涼みがてら立つことにしよう。千尋の布をさらしているような布引の滝で」となる。「たつ」は「裁つ」と「立つ」の掛詞（かけことば）になっている。「尋」は長さの単位で、布引の滝を長々

とさらしている布に見立てているのである。画面中に描かれた「滝見る人」の立場で詠まれており、その人が新しく布を裁って作った夏衣を着て、涼みながら滝の側に立って見ていると見立てたものである。「衣」「裁ち」「着む」「千尋」「さらせる」というのは、みな、「布引滝」の「布」から連想される言葉で、縁語という修辞にこだわって歌を仕立てている。縁語が和歌の中で発達した、いかにも和歌らしいと感じさせる修辞であることは言うまでもない。

匡衡の漢詩はどうであろうか。

早夏曝布泉を観る

閑かに望む 一条の瀑布泉

心静かに、一条の滝を眺めれば、

眼の塵 暗に尽き 巖の辺りに坐す

眼に映った世俗の欲望は、いつの間にか消え、巖の辺りに座る。

雲を穿ち 倒に瀉き 寒ゆる声は豎し

滝は雲を穿ち、真逆さまにそそぎ、牙え牙えとした音を鋭く響かせている。

疑はくは 是 銀河の天より落つるか

たぶん、これは、銀河が天から流れ落ちてきたのではないか。

この詩の視点は、恵慶歌と同じく、滝を近くで見える画中の人に設定されている。しかし、第三句、第四句から想像される滝は、雲に隠れて見えないほどの上空から、ごうごうと音を立てて流れ落ちる大瀑布である。「千尋の布」の想像も大きかったが、流れ落ちてきた「銀河」には負ける。実際の布引の滝は、確かに畿内では大きいほうかもしれないが、そこまで大きな滝ではない。万葉歌から大和三山がどんなに大きな山かと想像していたら、箱庭的に小さいというのとよく似ている。それにして

も、流れ落ちてきた銀河とは壮大で、とても美しい表現である。これには典拠があり、李白の「飛流直下三千尺 疑はくは是 銀河九天より落つるか」と（望廬山瀑布 其二）に拠ると木戸が指摘している。後に「天の川これや流れの末ならん空より落つる布引の滝」（金葉集・雑上・五四六・読 人不_レ知）など、類似する発想の和歌が詠まれるようになるが、これは匡衡やその典拠となった李白の漢詩の影響下にあるだろう。第三句についても、菅原道真の『菅家文草』中の「銀河倒に瀉きて長空より落つ」「清らに濺く寒ゆる声は罔すことを得ず」（二三三・観曝布水）に拠ると言う。匡衡の詩は、先行する漢詩句を典拠として、画面の外にまで想像が広がっていくスケールの大きな世界を描いている。

（渡邊裕美子「歌が権力の象徴になるとき」による）

〔注〕 住吉——摂津国（現在の大阪府、兵庫県の一部）の古郡名。

『恵慶集』——平安時代中期の歌人、僧である恵慶の歌集。

凡河内躬恒——平安時代前期の歌人。

屏風歌——屏風に描かれた絵を主題として詠作された和歌。

論衡——中国後漢時代の文人、王充が著した書物。

経信——平安時代後期の歌人、源経信のこと。

沖つ風吹きにけらしな住吉の松の下枝を洗ふ白波

——沖の方では風が吹いたらしいよ。住吉の岸辺の松の下

枝を、高くなつた白波が洗っている。

後拾遺集——平安時代後期の和歌集。

匡衡——平安時代中期の歌人、大江匡衡のこと。

先に述べたように——筆者はこの本文より前の部分で既に漢詩

「海浜の神祠」には題にも詩中にも「住吉」

の語が含まれていないことを指摘している。

『本朝麗藻』——平安時代の漢詩文集。

やまと絵——日本の風物を描いた絵。

『伊勢物語』——「昔男」を主人公とする、平安時代に成立したとされる歌物語。

瀑布泉——ここでは「滝」のこと。後の「瀑布泉」、「瀑布」も同様。

堅し——原典では読み方不明。「堅つ」とする説もある。

飛流直下三千尺 疑はくは是 銀河九天より落つるか

——滝は飛ぶようにまっすぐに三千尺も流れ落ちる。まるでそれは天の川が、天空から流れ落ちるのではないかと

思われるばかりだ。

木戸——木戸裕子。日本文学の研究者。

天の川これや流れの末ならん空より落つる布引の滝

——天の川はこれが流れつく先なのだろうか。空から落ちるような布引の滝だよ。

金葉集——平安時代後期の和歌集。

『菅家文章』——菅原道真の漢詩文集。

銀河倒に瀉きて長空より落つ

——大空の銀河がひっくり返って流れ出して落下するようだ。

清らかに濺く寒ゆる声は凶すことを得ず

——清く落下する滝の牙え牙えとした響きは凶画に描き出すことはできない。

〔問1〕⁽¹⁾ 風が吹いて波が立つのは当たり前、風が吹かないのに波が

立っている、これはやはり住吉社の神域だからこそ不思議な景色であろう。とあるが、恵慶の「風吹かぬ」の和歌について筆者はどのように捉えているか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 障子に描かれた世界に没入しながら『論衡』の表現を踏まえて風のない情景を描写し、世の中の安寧に謝意を示すとともに躬恒への敬意を詠み込んでいる。

イ よく知られた躬恒の歌と経信の歌を参考にして穏やかな世の中を賞賛するとともに、通常では起こりえない事象を描くことで住吉社の特殊性を詠み込んでいる。

ウ 先行歌である躬恒の歌の趣向を所々変えて平穏な世の中をたたえるところに、実際に住の江に立っているかのような臨場感をもって住吉社への畏敬を詠み込んでいる。

エ 躬恒の歌や『論衡』の表現を参考にして視覚的な表現に注力し、靈妙で格別な住吉を印象づけるとともに逆説的に日常のもつ神秘性と安らかな世の中の重要性を詠み込んでいる。

〔問2〕⁽²⁾ 恵慶歌と比べると、風が静まったところだけは共通

するが、違う部分のほうが目立っている。とあるが、「違う部分」について最も適切に説明しているものを、次のうちから選べ。

ア 恵慶の和歌は住吉社自体は詠み込まずに住吉社周辺の景物を取り上げて対して、匡衡の詩では人々の参詣の様子を中心に描くことによって直接的に住吉社を詠み込んでいる。

イ 恵慶の和歌は取り上げる景物をしばったうえで焦点がぼやけないように腐心しているのに対して、匡衡の詩では多くの景物に触れながら絵に描かれた風景をありのままに再現している。

ウ 恵慶の和歌は少ない三十一文字を有効に使うのに描き出しているのに対して、匡衡の詩では情報量も単語数も多いうえ畳語を適宜用いることで漢詩らしい調子を演出している。

エ 恵慶の和歌は先行歌が生み出した住の江の印象を踏まえた情景を切り取っているのに対して、匡衡の詩では時間の経過とともに変わる住吉の情景を想像力豊かに描き出している。

〔問3〕⁽³⁾ 「昔男」が兄や友人たちと連れだって、葦屋あしやのきと里から布引

滝を訪れて帰ってくるという話である。とあるが、『伊勢物語』八七段において「布引滝」を見た際に詠まれた和歌はどれか。

次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 津の国の生田の川の水上はいまこそみつれ布引の滝

イ 布引の滝の白糸わくらばにとひくる人もいくよへぬらん

ウ わが世をば今日か明日かと待つかひの涙の滝といづれ高けむ

エ 蘆の屋のまさごの山の水上にのぼりてみれば布引の滝

〔問4〕⁽⁴⁾ 匡衡の詩は、先行する漢詩句を典拠として、画面の外にま

で想像が広がっていくスケールの大きな世界を描いている。とあるが、どのようなことか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 匡衡の詩の第三句、第四句は、中国や日本の先人たちの発想や表現を援用しながら、絵という固定された二次元の領域を超えて、眼前にない壮大な情景をも描き出しているということ。

イ 匡衡の詩の第三句、第四句は、滝と星を斬新な発想で組み合わせたものであり、絵詩歌の枠を飛び出して、後世の歌人が受け継ぐべき手本としての滝の姿を描き出しているということ。

ウ 匡衡の詩は、李白の「望^ム廬山^ノ瀑布^ヲ 其^ノ二」にならって「疑はくは」という推量の表現を用いることで、読者自身が自由に想像できるように、広大な滝の姿を描き出しているということ。

エ 匡衡の詩は、李白や道真の漢詩の語句を用いつつ、「図すことを得ず」と道真が筆力を尽くしても描き出せなかった滝の雄大な姿を、奔放な発想により立体的に描き出しているということ。

〔問5〕次の発言は、本文を読んだ後に、「名所」と和歌の関係について生徒たちが意見を出し合ったものである。本文の内容を正しく踏まえての発言として最も適切なものを、次のうちから選べ。

ア 「風吹かぬ」の恵慶の和歌は、自然物である「住の江の松」と人工物である「海人の家」のイメージを詠み込んでいたよね。「初瀬山」と「鐘」や「布引滝」と「衣」も同じで、「名所」を詠む際には自然と世俗の対比をすることが必要なんだね。

イ 「布引滝」がそうだったように、ただ素晴らしい景物があるだけでは「名所」にはならなかったみたいだね。多くの人が長い時間の中で和歌に詠み込むことをくり返していくうちに、その場所や景物は和歌における「名所」になっていくんだね。

ウ 「名所」はイメージが大切で、何かに見立てることと強いつながりがあるね。松の木末が風に揺れる様子を波打ち際に寄せては返す波に見立てたり、白い水しぶきを上げて一筋に流れ落ちる滝を長いまっさらな布に見立てたりしていたよね。

エ 「大和三山」や「布引滝」のように実際にはそれほど大きくないものを、ことさらに大きく見せる力が「名所」を詠み込んだ和歌にはあるんだね。和歌によって想像を膨らませることで、実際に「名所」を見たときの迫力が増すんだね。

7
1
0

0

五
0